

## 富永有隣の帰省を送る叙

(丁巳幽室文稿)

安政四年九月十五日 二十八歳

安政四年九月十六日、吾が客富永有隣、将に母を南郡に帰省せんとす。同社の士十有一人、吾が松下塾に宿会して送別す。在学生中谷正亮、高杉暢夫方外の師許道、之れが袖領たり。自余の九人も下は秉燭の童子に至るまで、皆文武有志の士なり。是の日、塾徒東山に演銃す。童子皆これに従ひ、進退座作甚だ困れども、燭下猶ほ首を集めて読誦し、声戸外に徹る。倦みしものは則ち仆臥すれども、而も三人は方且に深談蜜語し、時に急にして切なるものを講究す。暢夫首を揺り声を抗げて曰く、「天地と人と、皆気のみ。人苟も気を養はば、以て為すあるべし」と。正亮曰く、「君を楠公に致し、身を赤穂に処す、是れ可なり」と。許道独り默然として退座し、一語も出ださず。之れを叩けば則ち曰く、「吾が師新たに我れを戒むるに、詩を廢して書を読まんことを以てせらる、吾れ方に其の言を思ふなり」と。余、時に諸友と孫子を講じ、業適々卒はる、亦『知る者は言はず』の言に感ずるあり。然りと雖も黙々たるを得ざるものは時なり。南郡固より多士ありと称せらる。今有隣の母を省みるや、将に遂に其の人を見んとす。有隣其れ其の盛んなるを覩て、其の雋なるを獲ば、庶幾はくは以て我が社を振ふあらんか。然れども人或いは謂ふ、「南郡の士、才富みて学貧しく、口弁にして識暗し、碁社簇りて文士阻み、酒徒群がりて武夫陷る」と。此の説果して然ら

ば、吾れ望むことなし。秋深く月白し、露降り雁鳴く。慈母堂に在り、その有隣を待つや久し。有隣其れ此れより去れ。

## 解説

安政四年九月、松下村塾の賓師（客員教師）富永有隣が、母の元に帰省する時に贈った送叙である。有隣は嘉永五年、三十二歳の時見島（現山口県萩市）に流されて以来、今六年目にして母に逢う為の帰省である。本文の前段は有隣送別の日の模様を記しているが、よく松下村塾の雰囲気を感じていると思われる。議論している者、それ聞いている者、誦誦する者、また疲れて横になっている者、などなど各人各様であるが、「皆文武有志の士」である。本文後段において、有志の士が多いと言われている南部（帰省先の山口市陶は萩市からは南部に当たる）に帰る有隣に「雋」なる者を見出して来いと使命を与えている。なお、国木田独歩の「富岡先生」は有隣がモデルと謂われている。

## 用語解説

南部 〓 周防国吉敷郡陶村。現山口市陶。 同社の士 〓 松下村塾生。  
宿会 〓 泊りがけで会合を開く。 在学生 〓 長州藩の藩校明倫館の在学生。  
中谷正亮 〓 一八三一—一六二 松下村塾生。文久二年、藩命により江戸に赴き発病、客死。  
高杉暢夫 〓 高杉晋作。名は春風。暢夫は字。 方外 〓 仏教。 許道 〓 僧侶の名。不詳。  
袖領 〓 集団の指導者。幹部。中谷正亮、高杉晋作、許道の三人が送別会の主唱者だった。  
自余 〓 それ以外。 秉燭 〓 手に燭台を持つこと。  
文武有志の士 〓 学問や武芸に志を持つ者。 演銃 〓 砲術の演習を行うこと。

進退座作 〓 立ち居振る舞い。 読誦 〓 声を出して読む。

倦みしものは則ち仆臥すれども 〓 勉強に飽きた者は、横になって休んでいるが。 深談密語 〓 深く心の底から語り合うこと。

時に急にして身に切なるもの 〓 急いでしななければならない務め。 急務。 時務。 講究 〓 物事を深く調べ、究めること。

人苟も気を養はば、以て為すあるべし 〓 仮に気力さえ十分に養いさえすれば、 立派な事業を成し遂げる事ができよう。

君 〓 藩主。 楠公 〓 楠木正成。 南北朝時代の武将。

赤穂 〓 赤穂浪士。 元禄十五年（一七〇二）一二月、吉良義央を襲って、主君浅野長矩の仇を討った元赤穂藩士四七士のこと。

詩を廃して書を読まんこと 〓 詩は『詩経』。書は『書経』。

余、時に諸友と孫子を講じ。卒はる 〓 この前日（安政四年九月一四日）に、『孫子の講義が終了した。「孫子評注」

知る者は言はず 〓 知者は軽々しく語らない、の意。『老子』下。『史記』の孫武。

呉起列伝の論贊。

黙々たるを得ざるものは時なり 〓 じっと黙っていていなければならないのは、時勢がそうさせるのである。

雋なる 〓 優秀な者。 吾が社 〓 松下村塾。

才富みて学貧しく、口弁にして識暗し 〓 才能は富んでいるが学問は浅く、口は上手いが識見が乏しい。

碁社 〓 碁の仲間。 文士 〓 学者。 文人。 酒徒 〓 酒飲み仲間

武夫 〓 勇士。 堂 〓 奥座敷。

[吉田松陰の名文・手紙を読む](#) [【目次】](#) [ページへ戻る](#)

[吉田松陰.com](#) [トップページへ](#)